

1969年度総会および研究発表会

1969年度総会および研究発表会は、5月21、22の2日間、東医健保会館において開催された。

21日の午前は恒例の総会が開かれ、1968年度の事業報告と決算報告、本年度の事業計画と予算案、会則の一部改訂の審議、役員選出、大西賞の授与などが行なわれた。

会則の改訂で、直接会員に影響の及ぶのは一般会費2,400円が3,000円に、学生の1,200円が1,500円

に、賛助会員の1口30,000円が40,000円になることですが、実施は1970年からで、今年度は従来どおりです。

なお、本年度の役員その他の人事は会誌の表紙裏および総会記事に掲載されています。

春季研究発表会については、プログラムおよび会場別スナップを掲載しました。

1. 総会記事

1) 1968年度事業報告

1. 研究発表会

- (1) 5月28、29日の両日、早稲田大学において、1968年度総会および第23回研究発表会を開催した。研究発表は総数46件、特別講演3件（特別テーマの信頼性に関する研究発表6件、特別講演1件）であった。

さらに、翌5月30日には科学警察研究所を見学した。

- (2) 11月14、15の両日、宮城県民会館において、第24回研究発表会を開催した。研究発表は総数56件、特別講演3件（特別テーマの地域開発に関する特別講演2件）であった。

さらに、翌11月16日にはキリンビール仙台工場を見学した。

2. 刊行物

「経営科学」第11巻3、4号、第12巻1、2号並びに第11巻特別号として「日本OR学会創立10周年記念特集」を発行した。「JORSJ」VOL 10, No. 3, 4, VOL 11, No. 1, 2 を発行した。

3. 国際協力

- (1) IAOR (International Abstracts in Operations Research) 前年度に引き続き、IAOR の

ための国内 OR 文献の抄録活動ならびに IAOR VOL 8, No. 1~6 の国内頒布に協力した。

- (2) 第5回国際OR会議 (5th International Conference on Operational Research) が来たる6月23日より27日までイタリアのベニスにおいて開催されるのを機会にこの会議に参加と同時に欧米のOR事情を視察するチームを派遣すべく会員に参加を求めた。

4. 大西記念文献賞

大西記念文献賞選考委員会の推薦により理事会で受賞者を決定した。

5. 研究会活動

- (1) 5月22、23日の両日、米国ランド・コーポレーションのDr. Malcolm W. Hoag より「PPBSとシステム分析」と題する講演会を経済団体連合会と共催し、会員に参加の便を計った。

- (2) 研究専門委員会に「電力部会」が設立された（昭和43年10月1日発足）

6. 事務所移転に関する件

通常、学生並びに賛助会員より移転のための資金をおおいだ、会員各位の協力により移転の目度が立った。混乱をさけるため大会終了後早い機会に移転を実施する予定である。

7. 支部活動

	北海道	東北	中部	関西	中国四国	九州
運営会議		支部総会秋季学会に協力	支部総会運営協議会 1 回	支部総会運営協議会 3 回	支部総会運営協議会 3 回	支部総会
研究会			12 回	グループ研究促進 (6グループ)	1 回	3 回
講習会					1 回	3 回
講演会			1 回		3 回	1 回
出版						「OR九州」創刊 1. 2. 3 号
その他				学生会員の増加本部との密接化	賛助会員勧誘のための会合	

8. 会員の状況

種 別	通常会員	学生会員	賛助会員
1967年度末	1,131	52	103 (社)
1968年度入会	126	55	13
1968年度学生から移行	16	-16	
1968年度退会	-31	0	-6
1968年度整理	-34	-1	
1968年度末	1,208	90	110

各 支 部 別

支 部 別	通 常 会 員	学 生 会 員	賛 助 会 員
本 部	736	67	59 (社)
北 海 道	20	1	2
東 北	77	0	3
中 部	77	3	15
関 西	153	18	19
中 国 ・ 四 国	96	1	8
九 州	46	0	4
合 計	1,208	90	110

2) 1968年度決算報告

貸 借 対 照 表

1969年3月31日現在

借 方		貸 方	
現 金	14,655	前 期 繰 越 金	3,273,712
振 替 貯 金	5,976	前 受 金	178,036
小 切 手 払 口 座	303,538	賞 金 積 立 金	514,875
普 通 予 金	1,168,711	退 職 積 立 金	363,000
当 座 予 金	27,069	当 期 運 営 残 高	2,587,772
定 期 予 金	4,586,246		
未 収 金	586,100		
過 年 度 未 収 金	225,100		
合 計	6,917,395	合 計	6,917,395

1968年度収支計算書

自 1968年 4月 1日
至 1969年 3月 31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
賛 助 会 費	4,170,000	刊 行 費	2,183,005
入 会 金	155,500	大 会 費	832,649
会 費	3,119,929	編 集 費	230,933
賞 金 積 立 金	200,000	会 合 費	261,229
特 別 会 費	2,334,500	通 信 費	594,725
I A O R	94,200	印 刷 費	637,145
雑 収 入	867,462	事 務 費	1,181,592
		事 務 消 耗 品 費	166,978
		旅 費 ・ 交 通 費	187,232
		手 数 料	62,715
		支 部 費	417,200
		I F O R S	75,451
		部 会 費	45,000
		大 西 賞	100,000
		雑 費	145,490
		会 費 徴 収 不 能	354,600
		賞 金 積 立 金	514,875
		退 職 積 立 金	363,000
小 計	10,941,591	小 計	8,353,819
		当 期 運 営 残	2,587,772
合 計	10,941,591	合 計	10,941,591

3) 1969年度事業計画

1. 研究発表会

春秋2回開催し、春季は東京において総会をかねて行ない、秋季は名古屋の中小企業センターにおいて10月28、29、30日に開催する。特別テーマは「経営計画とコンピューター」です。

2. 刊行物

- (1) 「経営科学」および「JORSJ」を各5回発行する。経営科学の中に読みやすい頁を設ける。
- (2) 出版の件「PPBSとシステム分析」のセミナーの記録を出版の予定。

3. 国際協力

- (1) IAORに協力する。
- (2) 海外から来訪するOR専門家と接触の機会をつくる。
- (3) 来る6月23～27日までイタリアのベニスで

開催のIFORS国際会議参加および欧米のOR事情視察団を派遣する。

4. 第6回国際OR会議

1972年度日本で開催予定の第6回国際OR会議の準備委員会を設立する。

5. 研究会活動

既設のスケジュールリング応用部会、電力部会は引き続き活発な活動をすると共に必要に応じ研究専門委員会に部会を設置する。

6. 視察団の派遣

ORに関するテーマ別の視察団を派遣する予定。

7. 事務所の移転

6月初旬新宿区市ケ谷仲之町18に事務所を移転する。

8. 日本OR学会大西記念文献賞

第3回大西記念文献賞の選考を行なう。

9. 受賞推薦

松永賞その他受賞候補推薦に協力する。

10. 他学協会等との交流

他学協会等との交流を積極的に進める。

11. 普及活動

講習会その他適当な普及活動を行なう。

12. 法人化を推進する。

4) 1969年度予算

借 方		貸 方	
科 目	予 算 額	科 目	予 算 額
賛 助 会 費	5,100,000	刊 行 費	3,186,000
入 会 金	155,000	大 会 費	996,000
会 費	3,210,000	編 集 費	356,000
I A O R 費	80,000	会 合 費	215,000
未 収 金	293,000	通 信 費	787,000
過 年 度 未 収 金	56,000	印 刷 費	764,000
雑 収 入	700,000	人 件 費	1,443,000
賞 金 積 立 金	700,000	事 務 用 消 耗 品 費	200,000
退 職 積 立 金	363,000	旅 費 ・ 交 通 費	243,000
前 年 度 繰 越 金	2,587,772	手 部 数 会 料 費	75,000
		I F O R S 費	60,000
		大 西 部 賞	155,000
		支 部 費	100,000
		雜 費	431,000
		事 務 所 移 転 費	32,000
		家 賃 費	1,630,000
		退 職 積 立 金	1,200,000
		賞 金 積 立 金	452,000
		予 備 費	600,000
			319,000
合 計	13,244,772	合 計	13,244,772

5) 会則の一部改訂および補足

章 条	現 行	改 正 案
第3章 第10条	<p>会員は次の義務を負うものとする。</p> <p>1) フェローおよび通常会員は年額2,400円、学生会員は年額1,200円の会費を納入すること、入会の際には通常会員1,000円、学生会員500円の入会金を納入することとする。</p> <p>2) 賛助会員は年額1口以上の会費を納入することとし、1口は30,000円とする。</p>	<p>会員は次の義務を負うものとする。</p> <p>1) フェローおよび通常会員は年額3,000円、学生会員は年額1,500円の会費を納入すること、入会の際には通常会員1,000円、学生会員500円の入会金を納入することとする。</p> <p>2) 賛助会員は年額1口以上の会費を納入することとし、1口は40,000円とする。</p>
第4章 第13条	<p>3) 理事および監事は評議員の互選による。</p>	<p>理事および監事は評議員により評議員の中から選出される。 但し、評議会が必要と認めた場合は名誉会員およびフェローの中から理事を選出することができる。</p>
第15条	<p>6) 評議員は評議員会を構成し、第20条に定める事項を審議する。</p>	<p>役員は評議会を構成し、第20条に定める事項を審議する。</p>
第16条	<p>会長、副会長、常務理事、監事、評議員、刊行物委員および幹事の任期は1年とし、重任を妨げない。 理事の任期は2年とし、毎年その半数を改選する。 理事はその任期中評議員の地位を失わない。 理事は重任できないものとする。 但し評議員会の承認を得た場合には3名以内に限り理事の重任を認めることができる。 理事および監事に欠員を生じた場合は、第13条3項の手続きにより、補充することができる。 但し、後任者の任期は前任者の任期による。</p>	<p>会長、副会長、常務理事、監事、評議員、刊行物委員および幹事の任期は1年とし、重任を妨げない。 理事の任期は2年とし、毎年その半数を改選する。 評議員の中から選出された理事は、その任期中評議員の地位を失わない。 理事は重任できないものとする。 但し評議員会の承認を得た場合には3名以内に限り理事の重任を認めることができる。 理事および監事に欠員を生じた場合は、第13条3項の手続きにより、補充することができる。 但し、後任者の任期は前任者の任期による。</p>
第5章 第20条	<p>評議員会は少くとも年2回開かれ、次の事項を含めた本会の運営全般についての重要事項を決定する。</p>	<p>評議会は少くとも年2回開かれ、次の事項を含めた本会の運営全般についての重要事項を決定する。</p>
第23条	<p>前会長、フェローおよび支部長は理事会および評議員会に出席し意見を述べることができる。</p>	<p>前会長、フェローおよび支部長は理事会および評議員会に出席し意見を述べることができる。</p>
附 則		<p>附則チ。この会則は1969年5月22日より施行する。 但し、第10条に関しては1970年4月1日より施行する。 1969年5月21日一部改訂した。</p>

2. 支 部 報 告

東北支部

I. 事業報告

1. 東北支部総会

43. 6. 1 仙台電電会館 出席会員 18名
記念講演「電子計算機の現状と将来」

東北大 大泉充郎教授

2. O R学会秋季全国大会

43. 11. 14~16 宮城県民会館

研究発表会 研究発表 54件 特別講演 3件

懇 親 会 県民会館食堂 55名参加

見 学 会 キリンビール仙台工場、

松島海岸 32名参加

支部として全国大会準備委員会を設けて本部に協力した。

3. 会員の状況

賛助会員 3 通常会員 約80

II. 収支決算

収 入		支 出	
予 算	決 算	予 算	決 算
本部交付金 49,000円	本部交付金 59,000円	講演会謝礼 3,000円	講演会謝礼 3,000円
前年度繰越金 64,228円	前年度繰越金 64,228円	研究会謝礼 6,000円	通 信 費 210円
	利 子 2,438円	印 刷 代 30,000円	総会(懇親会) 7,368円
		通 信 費 5,000円	役員会費等 2,410円
		総会役員会費 25,000円	予 備 費 112,678円
		予 備 費 44,228円	(残金44年度へ繰越)
合 計 113,228円	125,666円	合 計 113,228円	125,666円

III. 44年度事業計画案

講演会開催

研究会開催

普及活動

各職場の実情に合った普及活動を活発に行なう

IV. 44年度予算

収 入		支 出	
本部交付金(見込)	59,000円	講演会謝礼	5,000円×2 10,000円
前年度繰越金	112,678円	研究会謝礼	5,000円×3 15,000円
		資料印刷代	50,000円
		通 信 費	5,000円
		交 通 費	10,000円
		総会役員会費	25,000円
		雑費(設営費その他)	10,000円
		予 備 費	46,678円
合 計	171,678円	合 計	171,678円

V. 役 員

支 部 長 後藤杜介(東北電力)

副支部長 本多波雄(東北大)

春山 巖(電通局)

評 議 員 大島一男(東北地建)

加藤二郎(秋田大)

晴山敏雄(東北金属)

富田耕造(河北)

芳賀半次郎(東北大)

松田 彰(東北電力)

御園生善尚(東北大)

吉田 均(電電公社)

- 監 事 松山啓吾(電通局)
 幹 事 三国文治郎(東北電力)
 本間四郎(東北電力)
 木村正行(東北大)
 関 弘一(東北金属)
 加賀田晋成(東北地建)
 石丸幹芳(河北)
 庄司恒雄(電通局)

④その他
 特別講演

「M I S と O R」

東京工業大学 松田武彦氏

(2) 運営協議委員会

〔第1回〕

1. と き 4月19日(金) 17:30~18:30
2. と ころ 中産連ビル 集会室
3. 議 題 ①昭和42年度事業及び収支決算報告

②昭和43年度事業計画及び収支
 予算審議

③昭和43年度役員候補推選

〔第2回〕

1. と き 2月5日(水) 18:00~20:00
2. と ころ 中産連ビル 集会室
3. 議 題 昭和44年度秋季OR大会

名古屋開催について

2. OR研究会

中部支部

1. 昭和43年度事業報告

(1) 昭和43年度定期総会

1. と き 6月18日(火) 9:30~12:00
2. と ころ 中産連ビル 集会室
3. 議 題 ①昭和42年度、事業報告及び収支
 決算承認の件
 ②昭和43年度、事業計画及び収支
 予算審議の件
 ③役員選任の件

月 日	と ころ	テ ー マ	発表(講演)
4/19	中産連ビル	「潮流図の作成計算について」 (整流解線型計画法とカーブ・プロッテ ィング)	中部電力(株) 事務機械化担当 榎本久徳
5/24	〃	「広告費の決定」	(株)電通 名古屋支社 近藤喜典
6/18	〃	「M. I. S. とOR」	東京工業大学 教授 松田武彦
7/19	〃	「シミュレーションによる極値推定誤差 について」	中部電力(株) 事務機械化担当 榎本久徳
8/23	〃	「確率過程について」	名古屋大学 教授 飛田武幸
9/17	〃	「OR的問題把握について」	日立システムエン 지니어リング(株) 取締役開発部長 多田和夫
10/18	〃	「M. I. S. に必要な基礎計算技術につ いて」	日本ユニバック(株) 小林功武

月 日	と ころ	テ ー マ	発表(講演)
11/22	中産連ビル	「都市圏における大量輸送」 (スカイバスについて)	名古屋鉄道(株) 電子計算部長 村手 光彦
12/23	〃	「G. P. S. S. とその適用例について」	日本アイビーエム(株) 名古屋データセンター 山根 孝善
2/7	〃	「M. I. S. 時代のORワーカーの役割」	松下通信工業(株) 開発部長 唐 津 一
3/28	〃	「台湾よも山話」	小野勝次支部長

3. その他の会合

10月18日

小野支部長台湾渡航社行会開催

3月28日

小野支部長 名古屋大学より静岡大学学長

に栄転の祝賀会

OR研究会より記念品贈呈

4. 会 務

1. 賛助会員の移動

	42年度末	入 会	退 会	増 口	減 口	現 在
社 数	14	0	0	0	0	14
口 数	14	0	0	0	0	14

2. OR研究会

	42年度末	入 会	退 会	増 口	減 口	現 在
社 数	12	3	1	0	2	14
口 数	27	4	1	0	2	28

入	会	中部火力工事(株)
		三井東圧化学(株)名古屋工業所
		三菱化成工業(株)四日市工場
退	会	東京芝浦電気(株)名古屋営業所
減	口	日 本 碍 子(株)
		日立システムエンジニアリング(株)

5. 昭和43年度決算報告

収支決算書

自 昭和43年4月1日
至 昭和44年3月31日

日本OR学会中部支部
O R 研 究 会

		学 会 支 部	O R 研 究 会	合 計
本 部 a/c	賛助会費収入	380,000		380,000
	本部送金	350,000		350,000
	本部未送金分	30,000		30,000
① 前年度繰越金		123,605	300,536	424,141
収 入	補助金	90,000		90,000
	研究会収入		171,600	171,600
	預金利息	4,306	5,932	10,238
② 当期計		94,306	177,532	271,838
③=①+② 合計		217,911	478,068	695,979
支 出	旅費交通費	34,870	270	35,140
	会議会合費	18,510	1,690	20,200
	研究会費	10,000	30,540	40,540
	会場費	12,900	31,910	44,810
	印刷費	6,820	1,500	8,230
	通信費	4,570	5,105	9,675
	雑費 事務費	3,194 15,000	43,515 15,000	46,709 30,000
④ 当期計		105,864	129,530	235,394
当期収支差引 ②-④		△ 11,558	48,002	36,444
次期繰越 ③-④		112,047	348,538	460,585

貸借対照表

昭和44年3月31日現在

日本OR学会中部支部
OR研究会

科 目	金 額	科 目	金 額
銀行預金	478,585	OR学会繰越金	123,605
未収研究会費	42,000	OR研究会繰越金	300,536
		当期OR学会残高	△ 11,558
		当期OR研究会残高	48,002
		預り金	30,000
		未払金	30,000
合 計	520,585	合 計	520,585

「註」

未収研究会費

日本IBM

36,000

南濃商事

6,000

預り金

中日新聞賛助会費

未払金

中産連支払分事務費

学会 a/c 15,000

研究会 a/c 15,000

昭和44年度収支予算

(昭和44年4月～昭和45年3月)

日本OR学会中部支部
OR研究会

		学 会	研 究 会	合 計
収 入	本部よりの交附金	90,000		90,000
	法入28 研究会会費収入 個人1		171,600	171,600
	合 計	90,000	171,600	261,600
支 出	旅 費	25,000	15,000	40,000
	会 議 会 合 費	15,000	15,000	30,000
	研 究 会 費	10,000	70,000	80,000
	会 場 費	7,000	30,000	37,000
	印 刷 費	10,000	10,000	20,000
	通 信 費	5,000	10,000	15,000
	事 務 費	15,000	15,000	30,000
雑 費	3,000	6,600	9,600	
合 計		90,000	171,600	261,600

前年度繰越金 460,585円(学会112,047円

OR研究会 348,538円)は予備金とする。

関西支部

昭和43年度 日本OR学会関西支部活動の概要

昭和43年5月からこれまで途だえていた関西におけるORの支部活動の体制を再建し、民主的に活発化することを計画してまいりました。

このために、基礎的に

1. 支部における共同の勉強・研究会の振興
2. 支部におけるOR普及活動
3. OR学会の会員を増す活動

4. 本部との関連の密接化

を上記の順の weight で意図してきました。

この実績は、大略、下記の通りであります。

(1) 共同の勉強・研究会の会合の振興

中断していた関西支部における共同の勉強・研究をさかんにするため、グループを6つ作り、関西におけるグループ研究を促進した。そして、これらの研究会(本部からの援助費による)を公開でおこなうことにし、支部会員は予め通知をうけて自由に、興味のあるテーマ、都合のよい場所・時間に次表のどのグループにも参加出来るようにした。

Group	代 表	Subject	備 考 (場所・時間)
R ₁	三根 久先生	Stochastic Analysis of Traffic Flow Theory 1 marketing 2 Renewal theory 3 mathematical programming	京大・工・数理工学教室講義室 1968(12.27) 1969(1.22, 2.22, 3.12)の午後2時から
R ₂	米谷栄二先生 佐々木綱先生	交通流におけるOR的諸問題	京大・工・交通土木科 運輸交通計画研究室 毎月第一木曜午後2時から
R ₃	横山 保先生	Search Theory and Combinatorial Theory	大阪大学経済学部横山先生の研究室 (連絡角田氏) 毎月第一木曜午後2時から
R ₄	西田俊夫先生	Queing theory and Maintenance policy	大阪大学工学部(都島) 西田先生の研究室 毎月第3月曜午後6時から (連絡栗栖氏)
R ₅	坂口 実理事	Information and Decision Processes (Game theory and math programming を含む)	大阪大学・基礎工・数理学教室 (豊中市待兼山) 毎月第3土曜午後2時から
R ₆	加瀬滋男先生 浅野長一郎理事	The sequencing problems	大阪府立大学経営工学教室 又は日本規格協会 又は当関西支部(午後6時から) 月1回第3水曜日 (連絡太田氏)

なお、教材・会場・茶菓・労力の費用として、各班とも2万円を支出しました。

従来、この種の活動が途だえてきた理由として
 (イ) テーマが多岐にわたり、またその水準も揃わず、参加者の興味が減じられる。

(ロ) 距離的に毎回1カ所に集まることが出来にくい。

(ハ) 時間的に不都合が生じやすい。

(ニ) 毎回1カ所で行ってきた過去を知ると、ついには数名しか集まらないことが多かった。などに原因した。

今回の6班の編成により、これらの難点が大巾に改善され、従来より活発化したと考えられる。

(2) OR普及活動

本年の4月中に、上記の成果の報文集を作成し、関西支部の全会員に配布する。現在、この編集を次ぎのように行っている。

さらに、本年5月以降にこの各グループの成果内容を支部大会で発表してもらい、討議を行う。

この発表会と支部総会を兼て行い、上記の成果と意見をあつめる。なお、その際には、新たな研究グ

ループの編成をも検討し、また応用面への接近をも新たに立案する段取りである。

(3) 学会員の増加活動

上記の各項のPRをふくめて、学会活動の根幹は個人会員にあると考え、当支部では個人会員への加入を日常に勧めてきた。

このため、43年度中に郵送又は手渡しした会員申込みハガキは73枚にのぼった。

しかし、この中、どれ程が入会したか、支部では明らかでないが、30名の新入会は確定と数えられる。

(4) 本部との密接化

当支部としては、まず地元関西におけるORと学会活動をさかんにする基礎がためが先決と考え、このためにも本部との良い意志の疎通性を必要とする。したがって、昭和43年度の学会・副会長・常務理事会・理事会にはつとめて参加し、欠席は1回のみであった。また、本部事務事務局とも必要に応じ連絡を行った。

日本OR学会 関西支部 昭和43年度 会計報告

昭和43年4月24日現在

1. (収入の部)

前年度よりの繰越金 (西田・朝尾両理事よりの引きつぎ分)	¥ 156,437
本部より関西支部への入金 (銀行手数100料円を除く)	¥ 98,900
銀行利息	¥ 3,956

計	¥ 259,293
---	-----------

2. (支出の部)

理事会出席旅費 (のべ8回)	¥ 53,280
班別研究費 (6班)	¥ 120,000
事務費 (宛名がき, その他労賃) (3名分)	¥ 2,100
通信費 (切手・ハガキ・送金料)	¥ 8,100

計	¥ 183,480
---	-----------

3. (差引き残高)

¥259,293. - ¥183,480. = ¥75,813

但し、この中からまだ43年度研究報文集の発行代を支払わねばならない。

現在高 ¥ 75,813

中国四国支部

昭和43年度 事業報告

1. 総 会	1回	43. 7. 13	会場	広島商工会議所
2. 運営協議委員会 ならびに幹事会	2回	43. 7. 23	会場	東洋工業
		43. 8. 8	//	セントラル・ビル
3. 研 修 会	1回	43. 8. 20~22	会場	東洋工業, O・R夏季研修会 6テーマ, 参加18社28人
4. 研 究 会	1回	43. 12. 14	会場	広島大学工学部 2テーマ
5. 講 演 会	5回	43. 6. 24	会場	広島商工会議所 題目, システム計画の実施例について, 唐津 一
		43. 7. 13	会場	広島商工会議所 題目, 近代経営とMIS, 松田武彦
		43. 8. 29	会場	中国電力 題目, 米国における電子計算機利用状況を視 察して, 横山 保 萬代三郎
		43. 9. 17	会場	広島商工会議所 題目, 通信回線と電子計算機との結合による 情報処理の将来について, 林 一郎
		43. 12. 13	会場	高松電気ビル 題目 企業経営と電子計算機, 坂井利之

昭和43年度 収支決算書

自 昭和43年 4月 1日
至 昭和44年 3月 31日

収		入	支		出
科	目	金 額	科	目	金 額
前 期 繰 越 金		17,525	通 信 費		10,040
本 部 交 付 金		80,000	会 合 費		4,532
			印 刷 費		17,050
			事 務 費		12,000
			講 演 会 費		20,000
			研 究 会 費		13,792
			雑 費		8,960
			次 期 繰 越 金		11,151
合 計		97,525	合 計		97,525

昭和44年度 事業計画		(2) 講演会	年4回
1. 会議		(3) 研究会	3カ月に1回
(1) 総会	1回	(4) 普及活動	
(2) 運営協議会	2回	(1) 四国地方及び宇部を中心	にした普及活動
2. 事業		(2) 賛助会員並びに一般会員	の拡大
(1) 夏季研修会	開催地 高松市		
	期間 2日間		

昭和44年度 収支予算

収		入	支		出
科	目	金 額	科	目	金 額
前 期 繰 越 金		11,151	通 信 費		10,000
本 部 交 付 金		74,000	会 合 費		5,000
			印 刷 費		15,000
			事 務 費		12,000
			講 演 会 費		20,000
			研 究 会 費		20,000
			雑 費		3,151
合 計		85,151	合 計		85,151

九州支部

1) 1968年度支部活動報告

1. 主な会合

(1) 第3回支部総合開催

日時 昭 43. 5. 10 16.30~17.30

場所 福岡・生産性九州地方本部

議事 ① '67年度事業報告・収支決算報告

② '68年度事業計画・収支予算決定

③ 役員改選・本部役員の推薦

④ 学会関係報告

(2) 支部運営協議会開催

日時 昭 43. 5. 10

場所 福岡・富士ビル

議事 事業の報告および計画

(3) 理事会出席

第3回理事会 東京 内山支部長・三上理事

第4回 // 仙台 三上・堀川理事

2. 部報「OR九州」の創刊

支部発足3年目を迎え、活発なコミュニケーションを喚起するため、ニュースを盛り込んだ部報「OR九州」を企画創刊した、

主な記事は表 1. のとおり、

3. 域内協力その他

(1) 共同研究会の開催

ケーススタディ、グループ交流の場として、多数の適用事例が発表され、マネジメントサイドからもORを中心に経営全般にわたる問題について、情報の交換が行なわれた。

◇ 九州OR共同研究会

発表テーマは表2のとおり、

◇ 福岡地区OR研究会

発表テーマは表3. のとおり、

(2) 講演会・講習会の開催

○ 講演会

テーマ 「企業の研究開発業務へのアプローチ」

講師 九州工業大学 教授
堀川映二氏

日時 昭 43. 8. 28

場所 北九州・八幡化学<戸畑>

○ 講習会

◇ 第2回OR基礎コース

主 催 生産性九州地方本部

共 賛 九州IE協会・日本OR
学会九州支部

講 師 九州大学工学部 教授
三上 操氏
日時・場所 昭 43. 5. 23~6.
22< 8 日間>・福岡
座談会出席 八幡製鉄所 副技師長
内山辰丙氏
西日本鉄道 監理部長
梅根 定氏

(3) その他

- 最適制御の参考書紹介
OR九州第3号へ掲載
- セミナー「PPBSとシステム分析」
に参加
講 師 Malcolm W. Hoag 博士
日時・開催地 昭 43. 5. 22~23・東京
- 会員の状況

◇ 幹部のためのOR講座

共 催 九州IE協会・日本OR
学会九州支部
テ ー マ 「経営活動におけるOR
の役割」
講 師 九州大学工学部 教授
三上 操氏
日時・場所 昭 43. 4. 4~5. 芦屋

年 度	通常会員	学生会員	賛助会員
1966・5	20	0	5<10>
1967・3	47	0	4<8>
1968・3	52	0	4<8>
1969・3	49	0	4<9>

「OR九州」の主な内容

No.	発 行	主 な 記 事 と 執 筆 者
1.	'68. 8. 1.	<ul style="list-style-type: none"> ○ 巻 頭 言 部報の創刊に際して 支部長 八幡製鉄所 内山辰丙氏 ○ 提 言 だるう手でない手 九州工業大学 堀川映二氏 ○ セミナー報告「PPBSとシステム分析」 八幡製鉄・八幡製造所 村上紘一氏 ○ 紹 介 「OR用語のJIS」制定に参画して 九州大学 三上 操氏
2.	'68. 11. 1.	<ul style="list-style-type: none"> ○ 巻 頭 言 OR活動成功への途 副支部長・九州大学 三上 操氏 ○ 事 例 物的流通の合理化 八幡化学 浜口隆也氏 ○ 随 想 延岡から 旭化成 岡部正治氏
3.	'69. 2. 1.	<ul style="list-style-type: none"> ○ 巻 頭 言 ORの展望と使命 九州電力 太田五郎氏 ○ 考 察 情報検索 九州電力 池田哲郎氏 ○ ル ポ '68秋季研究発表会に参加して 八幡製鉄・戸畑製造所 山村千春氏 ○ 紹 介 最適制御の参考書 八幡製鉄所 ORグループ

◇ 九州OR共同研究会<第23~26回>発表事例一覧

回	開催日	開催地	参加	テ マ	発 表 者
23	S 43 5. 24	小倉 住友会属	44	製鉄原料配合計算の1方法について	住金小倉
				手入コスト低減調査	//
				PERT活用によるロール組替作業の合理化	//
24	S 43 8. 28	戸畑 八幡化学	39	当所における流通コストについて	八幡化学
				現業サービス要員算定のためのシミュレーションについて	九州電力
				化成生産計画機械化について	八幡化学
25	S 43 11. 21	福岡 九州電力	43	送電線建設工事へPERTの導入事例	九州電力
				車検整備における工程改善と要員について	西日本鉄道
				水力発電所建設工事用のパラセメント抜取検査について	九州電力
26	S 44 2. 21	八幡 安川電機	41	設計業務における電用部品の展開とその利用について	安川電機
				製品在庫の集中管理による合理化について	//

◇ 福岡地区OR研究会<第15~18回>発表事例一覧

回	開催日	開催地	参加	テ マ	発 表 者
15	S 43. 6. 28	福岡 西 鉄		長期要員計画の検討	九州電力
				ガス販売量の予測	西部ガス
				車検整備における工程改善と要員について	西日本鉄道
16	S 43. 9. 11	// 九 電		ガス販売量重回帰分析の1つの試み	西部ガス
				大牟田線駅務掛員の適正配置	西日本鉄道
				委託工事ともなう支払保留金の想定について	九州電力
17	S 43. 12. 6	// 西部ガス		ガス販売量の予測について	西部ガス
				シミュレーション適用における問題点について	九州電力
				経営層・管理層のためのE. D. P. 教育	西日本鉄道
18	S 44. 3. 18	// 西 鉄		電車定期修理工程改善	//
				計量モデルによる経済見通しについて	九州電力
				ガス料金入金管理業務の機械処理について	西部ガス

2) 1968年度支部会計決算報告

<'68 4. 1. ~ '69. 3. 31>

収 支	項 目	予 算	決 算
収 入	1. '67年度からの繰越金	51,381	51,381
	2. 支 部 費	48,000	52,000
	3. 雑 収 入	619	1,306
	銀行預金利息	上期分 566 下期分 740	
	合 計	100,000	104,687
支 出	1. 会 議 費	35,000	25,070
	(1) 支 部 総 会 費	15,000	11,370
	(2) 支 部 運 営 協 議 会 費	10,000	3,700
	(3) 本 部 会 議 費	10,000	10,000
	2. 研 究 講 演 会 費	40,000	20,000
	3. 部 報 費	20,000	11,000
	4. 通 信 連 絡 費	3,000	3,868
	5. 予 備 費	2,000	895
	合 計	100,000	60,833
	'69年度へ繰越金	0	43,854

3) 1969年度支部活動計画

昭和41年5月学会の要望にこたえて支部設立以来、われわれとしては、情報の交換、相吾啓発、部報「OR九州」を創刊するなど、実質的な活動を通して、地域産業社会の発展および経営の効率化に寄与すべく鋭意努力を重ね今日に至っております。

本年はさらに、学会の内外機関といっそうの連携をはかり、

1. ORを含む経営情報の提供
2. 企業におけるOR交流の展開

を行なうことをテーマに、産業におけるORの研究と情報の有効活用を目指し、会員の理解と協力に基づく総合的な活動を推進していきたい。

I 諸 会 合

1. 支部総会の企画と運営
2. 支部運営協議会
3. 研究発表会・理事会への参画

II 情報交換・研究活動

1. 部報「OR九州」の編集・発行
前年度に引続き、部報の発行を定期的に企画し、意志の疎通と相互の理解交流を活発に推進する。年4回<5, 8, 11, 2月>配布。

2. 情報・資料サービス計画の立案実施

経営上の問題に対するORの研究と活用の積極化を促すインフォメーションサービス。

3. 研究活動

- (1) 団体交流の充実向上
管理技法の相互啓発、レベルアップをはかるため、研究会は会員相互の理解と連帯のもとに継続して実施する。
- (2) 個別交流の推進
研究会は、ほとんどかたまってきたので、地域活動における経験交流の重要性を深めていくため、個人・グループもしくは代表者相互の交流、交歓・共同活動を進める。

III 域内協力

1. 講演会・懇談会等の開催
機会あるごとに講師を招いて、いろいろなテーマを組む。
2. 講習会の実施
 - ◇ OR基礎コース
年1回、福岡
 - ◇ 幹部のためのOR講座
主 催 生産性九州地方本部
共 賛 九州IE協会・日本OR学

'69 年度 支 部 活 動 ス ケ ジ ュ ー ル

日本OR学会九州支部

日 程	学 会 関 係	支 部 会 合	部 報 の 発 行	情 報 ・ 資 料 サ ー ビ ス	グ ル ー プ 研 究	普 及 ・ 教 育
44. 4	理事会	支部運営協議会				
5	総会・研究発表会 (東京)	第4回支部総会 (福岡)	「OR九州」4号		九州OR (西鉄)	
6	理事会 IFORS (イタリア)			「九州OR研究活用」	福岡OR (九電)	OR基礎コース (福岡)
7						//
8	理事会		5号		九州OR (三菱化成)	
9				//	福岡OR (西部ガス)	
10	理事会 研究発表会 (名古屋)	支部運営協議会				
11			// 6号		九州OR (黒崎窯業)	
12	理事会			//	福岡OR (西鉄)	
45. 1						
2	理事会		// 7号		九州OR (日本板硝子)	
3				//	福岡OR (九電)	

講 師 会九州支部
九州大学工学部教授 三上 操氏
座談会出席 八幡製鉄所 内山副技師長

3. その他
学会の内外諸機関との連携交流をはかる。
西日本鉄道 梅 根 部 長

4) 1969年度支部会計予算

<'69. 4. 1. ~70. 3. 31.>

収 支	項 目	金 額
収 入	1. '68年度からの繰越金	43,854
	2. 支 部 費	52,000
	3. 雑収入<銀行預金利息>	1,146
	合 計	97,000
支 出	1. 会 議 費	11,000
	2. 研 究 活 動 費	20,000
	3. 部 報 費	16,000
	4. 通 信 連 絡 費	5,000
	5. 予 備 費	45,000
	合 計	97,000

<注> 情報資料サービスに必要な経費は、研究活動費のなかで負担する。

3. 研究発表会プログラム

5月21日

(※発表者)

発表番号	講 演 題 目	
	開 会 の 辞	
	総 会	
1, 1- 1	特 別 講 演	
	未来と技術予測.....	朝日新聞社 岸田純之助
1, 1- 2	特 別 講 演	
	システムとOR.....	早 大 松田正一
1, 1- 3	On the Network Representation of the Railroad Traffic Capacity	中 央 大 山田 孜
1, 1- 4	A Note on Highway--Merging Problem with Acceleration Area	京 都 大 三 根 久
		// 三 村 猛※
		// 長 田 博
1, 1- 5	連結された2つの道路網の最短経路.....	中 央 大 蓼 沼 良 一
		蛇ノ目電機 田辺淳一
		東 芝 江口 滋二※
1, 1- 6	特 別 講 演	
	On the Use of Computer in the American Law	
	ウイスコンシン大学	Prof. Samuel Mermin

発表番号	講 演 題 目			
1, 1-7	押しボタン式交通信号に関する一考察………京 都 大	三 根 久	長 田 博	※
	//			
1, 1-8	一般のネットワークにおける貨物集結問題…鉄 道 技 研	鈴 木 誠	道	
1, 1-9	エレベーター交通の平常時における乗客到着モデルの提起			
	三 菱 電 機	小 池 将 貴	子	※
	//	大 西 祥	明	
	//	藤 田 明	佑	
	//	寺 山 佳		
1, 1-10	待ち行列系—M/G/I におけるある種の最適問題について			
	京 都 大	大 野 勝 久	上 田 徹	※
	//			
1, 1-11	多段階線型計画と中央集権決定行動モデル…日 立 製 作 所	江 藤 肇		
1, 2-1	A Method of Evaluating an Agricultural Development Programs			
	京 都 大	丸 山 義 皓		
1, 2-2	Areal Concentration of Commercial Function (1)			
	北 海 道 大	山 村 悦 夫		
1, 2-3	A Dynamic Model for Marketing………京 都 大	古 田 益 穂		
1, 2-4	多階層組織の管理システム………東 工 大	松 田 武 彦		
	//	諸 星 拓 二	※	
1, 2-5	マーケティングにおける O. B. S. の導入			
	生産財マーケティング研	大 石 展 緒		
1, 2-6	社内原料配分計画について………富 士 製 鉄	松 村 茂 行	堀 武 寛	※
	//	牧 登 吉		
	//			
1, 2-7	造船工場組立工程のスケジューリング………三 菱 重 工	黒 田 英 夫		
1, 2-8	ジョブ・ショップ・スケジューリングの解法			
	電 気 試 験 所	高 木 正 英		
2, 1-1	複数待ち行列の解析………電 通 研	橋 田 温	中 村 義 作	※
	//			
2, 1-2	Tandem Queue with Erlangian Inputs and Finite Waiting Room			
	大 阪 大	西 田 俊 夫		
	住 友 金 属 工 業	綿 田 弘	※	
2, 1-3	有限待ち行列回路の数値解法………九 州 大	須 永 照 雄	福 山 忠 彦	※
	//			
2, 1-4	First-Passage Distribution of Queues with General Input and its Application to Characterization of a Complex System			
	名 城 大	中 川 覃 夫		
2, 1-5	Finite Queue with general Input………名 城 大	中 川 覃 夫		
2, 1-6	T S S に関連する待ち行列について (Ⅲ) ……広 島 大	福 田 治 郎		
2, 1-7	ある種の待ち—在庫模型………統 計 数 理 研	牧 野 都 治		
2, 1-8	T S S における Round Robin 方式の待ち時間分布の解析			
	電 通 研	塚 本 克 治	中 村 義 作	※
	//			

発表番号	講 演 題 目
2, 1-9	特 別 講 演 情報産業とその発展について……………松下通信工業 唐 津 一
2, 1-10	System Reliability and Signal Flow Graphs 京 都 大 尾 崎 俊 治
2, 1-11	二次元指数分布の Redundant 部品を持つ複合システムの取替問題 大 阪 大 田 原 明 彦※ // 栗 栖 忠
2, 1-12	ノモグラフによるシステムの最適値決定 (2) 防 衛 大 佐 々 木 正 文
2, 1-13	Media Scheduling in Advertising Campaigns 京 都 大 三 根 久 // 新 井 慎 也※
2, 1-14	企業の成長と安定—M I S との関連において— 追 手 門 学 院 大 目 崎 憲 司
2, 1-15	最適在庫過程の解析的数値的研究—Ⅲ—多段ゲーム 東 京 都 立 工 業 短 大 小 田 中 敏 男
2, 2-1	(0-1)変数非線形計画問題に対する Implicit Enumeration について 京 都 大 成 久 洋 之
2, 2-2	ある種の Continuous L.P. 問題に対する解法 京 都 大 三 根 久 // 中 誠 誠※
2, 2-3	(0-1)変数線形問題に対する Generalized Origin による Direct Search Algorithm ……………京 都 大 三 根 久 // 成 久 洋 之 // 天 達 洋 文※
2, 2-4	Branch and Bound 法と並列処理 ……………東 北 大 阿 部 健 一※ 木 村 正 行
2, 2-5	推移確率行列が未知なマルコフ過程の最適制御 東 北 大 小 野 謙 一※ // 木 村 正 行
2, 2-6	Stochastic Programming に関する一考察 京 都 大 三 根 久 // 成 久 洋 之 // 加 地 範 行※
2, 2-7	Some Remarks on Optimality Conditions for Markovian Programming ……京 都 大 田 畑 吉 雄
2, 2-8	Yates の算法を応用した擬似正規乱数について 東 大 吉 沢 正
2, 2-9	Non-Linear な Parameter を含む曲線のあてはめとあてはまりのよさの検定 岡 山 理 科 大 仮 谷 太 一
2, 2-10	ある領域における最小自乗法について (第2報) 大 谷 技 術 短 大 野 田 竜 夫

2, 2-11	Parametric Goal Programming による投資案評価に関する研究	東工大 松田武彦
		// 宮嶋 勝※
2, 2-12	季節変動の指向性のはげしい需要の季節調整について	中国電力 米原正尚
2, 2-13	翌日負荷予想について……………中国電力	横田修活
		// 高木茂之※

1969年春季研究発表会報告 第2会場

私は第2会場の研究発表を一通り聴いたが、研究発表の要領が大変よくなってわかりやすくなったと思う。また、実際の問題に密着したものが多かったせいもあるだろう。

我々企業側の者が、OR学会の研究発表会に期待しているものは

- (1) 各企業においてどのように問題が解決されているか
- (2) 新しいRO的あるいは数学的考え方を知りたい

の2点が主であると思われる。(1)には勿論現実の問題がどのように解決されるべきかという事も含んでいる。このようなことを述べた論文として

A Modul of Evaluating an Agricultural Development Program.

等約半分の論文を大変興味深く聴く事が出来た。(2)に関しては新しいアイデア、手法を述べたものは残念ながら少ないように感じられた。

2日目の午前には整数解LPの解法に関する報告が集中したが、現在各国で計算速度の競争が行なわれている分野でもあり。もっと多くの報告が集まり国内でも競争が行なわれれば楽しいと思う。今回はまだ他の方法との実例による比較はあまり行なわれていないので残念であった。極論すれば、この分野はプログラム・テクニックも大きく影響を与えるので、実際の比較データを発表して欲しい。

興味深く聞いた報告

1. A Method of Evaluating Agricultural Development Program 京都大 丸山義皓
新品種、新耕種法を導入するとき農民がその時に当面する危険、不確実性に対してどのように反応するかを計数的に分析しようとするもの。
2. Areal Concentration of Commercial Function (1) 北海道大 山村悦夫

北海道における種々の商業の集積状態をグラフから読みとれるようにし、集積状態を明らかにした。

3. 多階層組織の管理システム

東工大 松田武彦, 諸星拓二

松田先生が最近よく話しておられる日米間の管理組織の相違つまりトップ・ダウン型とボトム・アップ型をある製造販売会社を例にしてモデル化しシミュレーションを行ったもの、是非もっと詳しく聞きたいものである。

4. 造船工場の組立工程のスケジューリング

三菱重工 黒田英夫

大きさの決っている定盤上で種々の船を組立てる時のスケジューリングを行なうもので、造船に要する定盤上に占める広さが船によって異なるためむずかしい。

5. Branch and Bound 法と並列処理

東北大 阿部健一, 木村正行

整数解線型計画法の1つの解法 Branch and Bound 法に並列処理をとり入れる事の可能性と手法を数学的に展開したもの。

6. Non-Linear な Parameter を含む曲線のあてはめとあてはまりのよさの検定

岡山理科大 仮谷太一

成長曲線(ロジスティック曲線)のあてはめ方法を述べたもの

7. Parametric Goal Programming による投資案評価に関する研究

東工大 松田武彦, 宮嶋 勝

投資決定の問題は他の計画、例えば生産計画、販売計画などを固定して論じられて来たが、この研究ではそれらを総合的に論じようというものでシミュレーションを行っている。

8. 季節変動の指向性の激しい需要の季節調整につ

いて 中国電力 米原正尚
EPA法による季節修正は、データが指向性（上昇、下降）を持っている時には、最近時の修正値が実際の傾向よりも小さく出ること指摘し、最近時のデータにウェイトを加えるEPAの修正法を報告した。

特別講演 「未来と技術予測」

朝日新聞社 岸田純之助

多くの工業諸国が直面しているのは、開発対象としてどのような題目を選択してそれにどれだけの費用を配分するのが最も望ましいかという選択と決定の問題である。このためには技術予測に対する体系的な接近法を確立することが必要である。OECDの科学顧問エーリッヒ・ヤンツの「技術予測の展望」(1966)が、世界の技術予測の方法について、体系的な調査を行なったのが、すぐれたものである。ヤンツは技術予測約100種の方法を22に分類し、さらに4つに大別した。

- ① 直観的手法 プレインストーミングをはじめいくつかの方法があるが、広く実用性を認められているのはRAND CORPORATIONのデルファイ・メソッドがある。これは専門家へアンケートをだして、それを整理したものを送り返し、それに対する回答を求める方法である。
- ② 探索的手法 外挿法のような演繹の技術予測。
- ③ 規範的手法 社会の要求をもとに技術予測を行なうもの。宇宙開発。
- ④ フィートバック手法 第2、第3の手法の組み合わせ。

技術予測は規範的態度から出発すべきである。有効な情報に近づくために、情報交換の広場が必要が必要である。

特別講演 「システムとOR」

早大 松田正一

行動システムとして組織体をとらえてORとの関係を論ずる予定であったが、時間の都合でシステムにAUTOMATION理論を適用するという試みを発表した。

混沌とん (CHAOS) から体系的 SYSTEM を作る

規則がシステム・ルールであり目標や手法の指定やそれを決定するものである。そのほか主体の行動をCONTROLする活動や行動ルールについても述べられた。

しかし、これはシステム理論のひとつとしてAUTOMATIONの理論を適用するとうまく説明できるとして、その適用にのみ重点がおかれ、講演者のみが楽しく遊戯をされている感じがして、はたしてAUTOMATIONの理論を適用して、難解なSYSTEM理論を作っても、それが現実の企業にどのようにむすびつづくの疑問である。

特別講演

「情報産業とその発展について」

松下通信工業 唐津 一

氏は昨年情報産業視察団のメンバーとして米国へ行かれた。これはその時の視察結果を中心にした話である。

日本未来学会というのがあってそこで言われていることには現在の工業化社会（国力の象徴＝工業力、生産性）から将来は情報化社会（情報が価値の中心となる）へと移るであろう。そしてこの情報化社会の推進力としてComputerと通信線が大きな役割をはたすであろう。

情報を扱う手段、アメリカでは1957年ATTがデータフォン・サービスを開始しコンピューターの大衆化を図った。これは電話線を使ってComputerを使おうというものである。今やコンピューター・エリートの時代ではない。誰でもComputerを使える様になってきている。その例を2、3あげる。

1. 米国ではComputerのショウにはComputer本体は裏へ回って表面に出ているのは端末機である。
2. 会話形式で劇場、野球場等の切符を発行するコンピューチケット3000台
3. 電話線を使って心電図を送り、ワシントンにそれを受けて解読するComputerを置いて心電図の解読。25,000件/月

情報産業とは何か

(プリンストンマハループは知識産業といっている)

1. 研究産業
2. 教育産業

3. マスコミ産業
4. 情報サービス産業
5. Hardware を作る産業
6. 通信産業

特に注目したいのは教育産業で、ジョンソン前大統領の演説を紹介された。

1. 未開発援助について、金、物をやってもだめだ。教育である。貧困との戦いは教育から始まる。

2. 米国は物と金を生みだすことに努力してきたが今一つ必要なものに知識がある。これをどこでもすぐに利用できる様な Knowledge Network を作ろう。

情報産業の中で特異な地位を占めているものに System Design がある。(ここで中野区役所の話が出る。)

N. Wieher は次の様に言っている。即ち、情報の移動と物の移動は同値である。

春季研究発表会報告 第1会場

第1日午後、第1会場 (5月21日)

特別講演が2件、研究発表が8件あった。研究発表は主として交通問題が中心となった。ORの定義、有効性、役割などは何度となく議論されていながら、いつも新鮮に聞える話題の一つである。最初の講演「システムとOR」(早大、松田正一教授)は、この問題に対して、システム観に立ってORを見ようとするものといえる。システムの定義に始ってORの位置づけに及ぶものであったが、残念なことに、システムそのものについて大半の時間が過ぎたために、また司会者の聞き違いもあって、肝心の「ORとの関連」の部分が省略されてしまった。いずれ学会誌にも掲載されることと思うが、省略された部分もぜひ載せて頂きたい。次はウイスコンシン大学、Samuel Mermin 教授(現在神戸大学工学部)による、アメリカの法律分野におけるコンピュータ使用状況についての講演があった。まず、法律の分野において、これからコンピュータが活躍する可能性のある領域を5つ挙げ、その中で最も重要なのは、弁護士が法律や判例の探索のためにコンピュータを使用することであるという。3百万件の裁判と5百万ページにのぼる判例がすでにあり、年々増加している。また条文は文書にして百万ページから成り、これに州の内規や行政上の規則等が加わるそうである。この data retrieval に関してつの方法(一つは資料をすべて store する、もう一つは要約と keyword を store する)についての実験例と、現在実施されているシステムについての説明があった。最後に政活科学者が興味を持つような、裁判結果を予測することにふれ、予測がうまくゆく条件として「同じ裁判所は同じ判例について同じ態度で判決を下す」ことが必要だが、判例の類似性は多くの要素

に依存して決まるから、この条件が満たされるのは困難であろうという。これは認定の方法にかかわり、それは価値判断の問題であるので、この種の問題に対してコンピューターは useless であろうということであった。概して裁判官をとりまく人に(弁護士、立法機関等)からみた法律についての話であって、裁判そのものについてのコンピューター使用にはふれられなかった。教授は、立法学の分野で、やらないで怠っていると法律の間に矛盾が起ること(negligence)をさけるために、コンピューター使用の可能性を示唆されていたが、やらないでくと、不公平な裁判結果が現れるという negligence はないのであろうか。

研究発表の方は、いつものことながらそのせつかくの苦勞がよく伝ってこないものが多い。いきさかゼスチャーがオーバーなのが気になったが、問題点が理解し易いことも手伝って、上手に説明したのは「エレベータ交通の平常時における乗客到着モデルの提起」(三菱電機 小池将貴氏他)であった。エレベータの操作方式を開発するためにシミュレーションを行なう必要にせまられた発表者等は、その基礎データとしてエレベータ利用客の到着パターンを求めようとする。利用客はグループを単位としてポアソン到着し、グループの大きさは、それから1を引くとポアソン分布に従うであろうという仮説を立て、実際に観測し、適合度を χ^2 -検定によって試す。この種の問題にはよくぶつかるせいか一種の親近感を覚える。発表者等が、自分の仮説にわくわくしながらエレベータの前に立って、ストップウォッチ片手に記録する姿が、目に浮かぶような気がするのである。最近あまりお目にかかれなくなった基本的な科学的態度、仮説-実験-批判のサイクルを

一応踏んできていることが好ましく、また普通の場合には、この種の問題は非常にどろくさくなって、論文として発表するには勇気があるものだが、グループの分布に対する仮説が変わっているのをポイントとして発表した努力を買いたい。

しかしながら、グループの大きさから1を引くとポアソン分布に従うという仮説とその仮説を導いた根拠は、いささか不自然な感じがしないでもない。普通であればまず幾何分布を試してみるところであろうし、この場合もその方がよく合うように思える。また複合分布を扱う場合、到着のグループの分布の独立性が仮定に含まれるのだが、その点にふれられていないのは残念である。シミュレーションでは各分布を独立に発生するのであろうから、いっそう重要な点であった。これらの仮説を受け入れるかどうかについては、形式的な統計的検定に頼るのではなく、直接にエレベーターの操作方式への影響の点から決める方法による方が望ましかろう。シミュレーションがそのためにも使えるのではないか。共通な話題のせい、質疑応答が最も活発であったのが印象に残った。

ターンパイク理論を思わせるのが“連結された2つの道路網の最短経路”(東芝 江口滋二氏他)。高速道路のある入口から入ったらどの出口(ランプ)から出るのが従ってどのような経路をとるのが目的地へ最短時間で着くことになるか。この問題をラベリング計算とD.P.を使って実際に解いてみたという実験である。一般道路と高速道路の2つの道路網がランプで“連結”されているというのがこの標題の意味である。一般道路では交差点で右折禁止や一方通行または交通渋滞があって、これらが所要時間に影響し、道路網の制限条件となる。勿論一つの道路網の問題としても解ける訳だが、一般道路網は条件が複雑であるので、それを先に処理(各ランプから各目的地までの最短経路を求めてしまう)して、あらためて高速道路網のいった最短経路問題を解くという形にする。本来の目的は、高速道路の利用者に目的地ごとの最適な出口と経路を示すことであったそうだが、入口40ヶ所、目的地60ヶ所、ランプ45ヶ所、交差点180ヶ所の規模の都区内の例に対して、発表者等の方法では約1時間半の計算時間を要するので、交通事情の急変には対処出来ないだろうということだった。

ターンパイク精神は国鉄の貨物輸送にも現われる。“一般のネットワークにおける貨物集結問題”(鉄

道技研, 鈴木誠道氏)。各地で発生した貨物は、最寄りの拠点に集結され、そこから大域的な輸送手段によって目的地に近い拠点に送られる。ある拠点を出発した貨物は、いくつかの拠点を通過して目的地まで運ばれるが、途中の拠点では中継のための作業時間を必要とする。そこでこのロスを少なくするために直通列車を仕立てることを考える。高速道路網に更にもう一段上の超高速道路を設定するようなものである。しかし一本の直通列車を仕立てるのには、それに応じた貨物がたまるのを待つためのロスがあるのでむやみに仕立てる訳にもいかない。従って貨物の輸送に要す。総滞留時間を最小にするような輸送方式が問題となる。これを非線型計画問題として定式化することは可能であるが、正面から解くのは大変なので、簡易解法を提案する。総滞留時間を最も減少させる可能性のある拠点間に、直通輸送を設定することから始めて、逐次修正しながら次の可能性を探り、総滞留時間の減少が得られなくなるまでくり返す方法である。このような解法の要点は解の一意性と、収束性にあるのだが、その肝心な点を聞きもらしてしまった。

同じく鉄道のことを扱った研究で“On the Network Representation of the Railroad Traffic Capacity”(中央大 山田孜氏)がある。あらかじめスケジュールされた急行列車の間に、待避する普通列車を何本通すことが出来るかという線路容量の問題を解くために、グラフに表現すれば、最大本数がそのグラフのminimal cutとして求まるという点に着目し、いくつかの典型的な場合のグラフ表現を与えるものである。グラフ表現が可能であっても、定式化は困難な場合もあり、グラフ表現の有効さを主張する。

これらの他に、興味ある研究発表が4件あったが省略させて頂く。今回の発表会を通して、研究発表が43件あったが、そのうち大学、又は研究所の方達によるものが35件、会社関係の方達のものが6件、その共同によるものが2件であった。現場の人達の間からもっと多くの発表があることを念じつゝ、家路についた。終了は午後時を過ぎていた。

(記 渡 辺 忠)

5月22日 第1会場 (9.00~12.00)

ここで発表された8件はすべて待ち行列の問題に関するもので、各種モデルの理論的な解析に主な関心が注がれている。Multiqueue, Tandem queue,

Finite queue などの解析がそれである。これらでは、系の状態方程式から出発する常用の手段で、待ち行列の諸特性が導かれている。また、最近話題の TSS（計算機共同利用方式）に関連して、待ち行列のモデルが2件提案されている。ともに、解析結果は極めて複雑で、数値例がないとその様相は把握しにくい。また、s-S政策の在庫モデルに関連して、在庫期間を問題とした待ち行列モデルが提案されたが、その着想が面白く、結果も簡明に表示されていたのが印象的である。

5月22日 第1会場 (13.00~14.00)

技術評論家としてマスコミ界で活躍している唐津一氏の「情報産業とその発展について」と題する特別講演である。情報の価値を強調し、その伝達手段をも含めた情報システムが、情報産業として今後の重要な国家的地位を占めていくことを指摘している。氏のもつ独得の話術に加えて、豊富な話題が随処に引用され、情報産業の意義と重要性がいつの間にか深く認識される1時間であった。

NHK 見学記

第12回春季大会が風かおる5月21日より23日まで行なわれ、総会並に研究発表会は多数会員の参集の下に盛大に行なわれた。この大会の見学会を23日NHKの番組技術システムについて行なうことを発表したところ、200名に及ぶ多数の申し込みがあり、学会としては一人でも多くの人に見学してもらいたい意向であったが、NHKとしては諸般の状況より、多数の見学を受け入れられないということであった。従って地方の人々を優先し、在京の人々には別に機会を作ることとして90名の人々が実際に見学会に参加した。見学当日は夏を思わせる暑い晴天で、朝9時30分に一同が代々木の放送センターに参集した。放送センターにおいては、先ず一般ルートで番組制作の実際がひと目でわかる番組制作工場を見学し、更にスタジオの見学を行なった。一般には見られない理科学用スタジオやテレビドラマのセット等を見て、更に放送を監視している電気空調監視室内で幸町より送られた情報がカソードディスプレイに表示され、それによってプログラムの編成を行なっている状況を見ることができた。午後内幸町のNHKにおいて番組技術システムの見学を行なった。人数の関係上6班に分けて番組技術システムに関する

映画説明及びコントロール・センター、EDPM室の見学をした。このシステムは放送の企画、立案より進行の一切がコンピューターによりディスプレイ上に指示され、間違なく進行管理が行なわれるようになっている。端末よりの質問に対して問答型式で回答が得られ、これによって進行が非常に正確に又迅速となり更に人手が大いにはぶかれる。更にこの巨大なシステムには多くのOR手法が用いられているとのことであった。機械室の巨大な電子計算機—IBM360モデル50I、IBM1800各2台には見学者一同が驚嘆させられた。また放送センターとの間の伝送路に4800ボアの信号を送っていたのは日本ではここしか見られないものであろう。全般的に見ればNHKであればこそこのような巨大なシステムが実施され得たので今更ながらNHKの隠れた実力をまざまざと見せられた思いがする。

このようなことは見学した会員すべてが感じたことと思われる。

なお本見学に対して種々の御面倒をおかけした経営情報室総務の坂倉氏に対して厚く感謝の意を表して筆をおく。 (原野秀永 記)